

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320022

研究課題名（和文）像（イメージ）の生動化についての比較美術史的研究

研究課題名（英文）Comparative Art Historical Studies on Animated Images

研究代表者

秋山 聡（AKIYAMA AKIRA）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：50293113

研究成果の概要（和文）：本研究では、主として東西における像の生動性についての伝説や、像の生動化の具体的事例についての画像・文献資料の収集と調査・分析、宗教儀礼における像の利用の諸相についての調査、近代以降の像の生動化に関わる諸事例の分析等を通して、像の生動化についての基本資料をまとめ、詳細な考察を行なった。その結果、像の生動化についての普遍的要素と地域的・時代的特性を浮かび上がらせると共に、比較美術史的アプローチの今後の有効性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research program, in order to construct the basis for comparative art historical approaches on animated images, we tried to compile legends, documents and visual sources on animated images and on diverse ways of animation of cult images both in Christian and Buddhist cultures and also on secularized cases of animation of images in modern era,. Through analyzing these assembled data by the researchers from diverse fields we could classify general elements and site- or time-specific characters of animated images from antiquity via the Medieval Period to modern times and indicate future possibilities of this kind of comparative art historical approaches.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2009年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2010年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
年度			
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：比較美術史、生動性、美術史、聖像・偶像

1. 研究開始当初の背景

申請者は、主としてアルブレヒト・デューラーを中心とした15、16世紀のドイツ美術史を専門としてきた。その過程で古代受容や人文主義に加えて、中世的伝統、とりわけ聖

遺物と美術との相関性を背景にしたの考察の必要を痛感し研究を遂行していたところ「人文主義と中世的伝統という複眼的視野からの研究」として評価されるとともに期待され、日本学術振興会賞（第二回）を受賞す

るに至った。これに力を得て、更に聖遺物や聖像の儀礼における「動態展示」の重要性に目を向けるに至った。加えて2007年3月に東京大学で開催された聖像をめぐる東西比較美術史的シンポジウムに参加することにより、キリスト教美術と仏教美術との間に相互影響関係を超越して、像の生動化や動態展示等の信仰実践の一形態としての造形イメージのあり方や扱いに種々共通点が存在する可能性を感じた。さらに比較美術史的アプローチが国際的にまだ十分に展開されていないことを、2007年9月にイギリスのイースト・アングリア大学で開催された世界美術史シンポジウムにおいて確認するとともに、彼地で予想を超えたポジティブな反応を得たこともあり、像の生動化についての比較美術史的観点からの研究を試みるに至ったものである。

2. 研究の目的

近代以前の造形イメージが、とりわけ宗教儀礼の枠組みの中で、ダイナミックに生動化されていたこと、また様々な像を受容し、知覚する人々がそれらが決して不動なものではなく、生動する可能性を感じ、また期待もしていたこと等、すなわち「像の生動性ないし生動化」についての時代や地域を越えての包括的アプローチはいまなお十分に試みられてきてはいない。そこで本研究では、主として東西の聖像・偶像をめぐる伝説の収集・分析、東西の靈験像の具体的事例についての調査および関連画像・文献資料の収集・分析、「像の生動化」の諸事例の分析等を通じて、「像の生動化」について、普遍的要素と地域的・時代的特性を勘案しつつ、基本的かつ包括的な考察を試みるとともに、世界美術史が普及する研究状況の中での比較美術史的アプローチの有効性を示すことを目指す。

3. 研究の方法

研究代表者である秋山聰が所属する東京大学大学院人文社会系研究科を拠点として本研究は遂行された。代表者は各メンバーと密接に連絡を取りつつ、個別に遂行される研究の進捗を把握すると共に、適宜各自の研究の方向性について助言した。具体的な作業としては、造形イメージの知覚・受容や造像行為の諸相を考察するために必須と考えられる西洋古代から中近世に至る聖像・偶像にまつわる伝説を博捜し、資料を集成すると共に、宗教儀式や祝祭行事における「像の生動化」の具体的事例に関わるデータを蓄積することにより、別途収集・整理される仏教美術関連の事例との比較の基盤を形成しつつ、比較宗教美術史の有効性を浮かび上がらせよう

とした。また各年度、メンバーを中心に、時に専門的知識を有するゲストを迎えての研究会を定期的開催し、情報の交換と議論を行なった。2010年5月には海外研究協力者を日本に招き、比較美術史的視点からの国内調査を共同して行なうと共に、像の生動性をめぐる公開シンポジウム「礼拝像の生動性をめぐって：東西比較の試み」を開催し、「像の生動化」に関する議論を深め、それまでの研究成果の一端を世に問うた。同様に2011年2月にG-COE「死生学の展開と組織化」主催の国際シンポジウム「イメージとヴィジョン：東西比較の試み」にメンバーが積極的に協力することにより、比較美術史的アプローチの有効性を確認するとともに、海外研究者との連携を一層密なものとした。

4. 研究成果

まず、研究代表者が中心となり、像の生動化に関する文献・図像資料の収集と分析を、西洋中近世の事例に比重を置きつつ、かつ東西比較の観点から行なった。とりわけ中世後期の修道院的文脈における神秘主義的文献中に像の生動性や靈験像に関わる資料が多く存在することが明らかとなり、仏教美術における事例との比較可能性が高いことが確認され、比較の基盤とすべく西洋中近世の事例をまとめた論文を2008年度末にまとめた。また研究代表者は、西洋中近世の宗教儀礼における像の利用についての資料収集にも努め、先行研究を批判的に摂取しつつ、現存する具体的作例および文献資料の網羅的整理を試みた。とりわけ可動式キリスト像（主として可動腕付き磔刑像および昇天儀礼用キリスト像）に重点を置いての研究成果の一部は2010年4月に地中海学会研究会において発表され、現在論文としての刊行が準備されている。なお可動腕付き磔刑像については、従来相互関連の研究がなござりにされてきたイギリス、イタリア、ドイツ、フランスの諸事例を包括的に論じることの必要性を指摘するに至った。またこうした像を用いた儀礼と、活人画や祝祭行列との親近性ととも、仏教における来迎会や行道との比較参照の有用性が判明した。さらに、礼拝像の生動性への信仰や期待が、像の生動化を促進せしめ、場合によってはオートマトン（自動機械）的造像が行なわれ得たことを、カトリック側文献だけではなく、プロテスタント系の偶像破壊者側資料から浮かび上がらせることが出来た。

さらに研究代表者を中心として、研究分担者、研究協力者の支援の下、大学院生の助力を得て、日本・東洋における像の生動性に関する資料の収集と整理を進め、西洋との比較の基盤を形成する作業を展開した。これによ

り、とりわけ像からの物質の分泌や芳香、放光に関わる逸話、また像の種々の運動可能性（歩行、飛行、水泳、発話、目や口の開閉）に関わる伝説、さらにはアケイロポイエトス（非人造物）としての像についてのトポス等、東西比較を深化させることのできるタイプを抽出することを得た。

また研究代表者は、像の生動化という観点からの諸分野での研究の深化をメンバーに懇諭しつつ定期的に研究会を開催した。ここでは、古代ギリシア・ローマにおける生動性伝説、近現代のパフォーマンス芸術における生動性、西欧および日本におけるタブロー・ヴィヴアン（活人画）、西欧近代における機械仕掛けの絵画（タブロー・メカニック）、中近世宗教儀礼における像と人の共演等の発表が行なわれるとともに、活発な議論が交わされ、比較が重ねられた。これにより、比較美術史的アプローチの有効性を大いに確認するとともに、前近代において像の生動性の知覚をより一層喚起する必要性から生動化の諸手法が発展する一方で、像の生動化の多様化が新たに幅広く像の生動性の知覚を普及せしめる面があったこと、また近代以降宗教文化が衰退する過程で、像の生動性の知覚や像の生動化が、例えばオートマトン（自動機械、自動人形）という形式において顕著なように、著しく世俗性を高めつつも周縁文化の中に残存して今日に至っており、前近代の像の生動性に対する感覚が、一種の郷愁として我々の中にも沈殿している可能性が高く、ユリウス・フォン・シュロッサーが蠟製肖像彫刻の歴史的展開について指摘する現象と近似すること等も判明した。

またさらに具体的には、聖遺物/舍利の像内納入や、像に対する着装や植髪といった行為なども像の生動化の普遍的な一手段であること、奇跡を記録する造像行為や像を活用した宗教儀礼も東西通有の現象であること、像の「動態展示」と活人画や祝祭行列がベクトルの向きが異なる相似的现象であることなどを、連携研究者や研究協力者の支援を得つつ、具体的事例に即して明らかにすることが出来、そうした成果の一部を2009年6月にモスクワのロシア芸術アカデミーにおける国際シンポジウム「空間的イコン」において発表する機会を得た。その際、美術史のみならず周辺諸領域の研究者からも広く共感を抱かれるとともに、とりわけロシア宗教・民俗文化における諸事例との比較の可能性についての有益な指摘を受けた。なおこの発表が掲載される英・露文による報告書は現在ロシアにおいて印刷中である。また検討事例を異にした同趣旨の発表は、同年10月にエジプト、アレキサンドリア図書館において開催された国際シンポジウム「死生の対話：エジプトからの視点」においても行なわれ、主

としてコプト教における事例との比較についての議論が進展した。

2010年5月には、それまでの研究成果の一端を披歴し、広く議論に供すべく公開シンポジウム「礼拝像の生動性：東西比較の試み」を開催し、キリスト教における奇跡像の諸事例が、古代ギリシア・ローマ美術や東アジアの仏教美術の諸事例、また近現代社会における世俗的諸事例と様々な共通点を有することが浮かび上がり、比較美術史的アプローチの有効性が再度確認された。この折の海外研究協力者ミケーレ・バッチによる発表は『死生学研究』に掲載されており、またシンポジウムの全体の映像記録も東京大学文学部視聴覚センターにより作成されている。また同氏は同時に各地において比較美術史的観点からの調査を行なったが、それを踏まえたセミナーを東京大学で行ない、加えて、目下その成果の一部として像の生動化の手段としての聖遺物の像内納入についての比較美術史的論考をイタリアで公刊する準備を行なっているところである。また2011年2月にG-COE「死生学の展開と組織化」が主催した国際シンポジウムにも本研究のメンバーが積極的に参加・協力した。中でも研究代表者による「像の生動化」の普遍的な手段としての「植髪」についての研究代表者による本研究成果を踏まえての指摘・提案は、ハーバート・ケスラー氏をはじめとする参加者の関心を惹起した。また本研究の展開する比較宗教美術史的アプローチについても、海外からの招聘研究者や国内の宗教美術研究者からポジティブな反応を得、将来的な共同研究の可能性を打診された。これまでの成果および活動の結果、研究代表者は2012年夏にドイツ、ニュルンベルクにおいて開催予定のCIHA(国際美術史学会)第33回世界大会において第3セッション「宗教とその客体化についての国際比較的観点からの研究」の共同座長に指名され、これに伴い参加した2011年5月の同地における座長会議において、本研究の成果の一部を踏まえてのプレゼンテーションを行なう機会を得、海外研究者との一層の研究交流が展開された。この他、現時点までにアリゾナ大学/テキサス大学やカリフォルニア大学からの共同研究の打診を受けるに至っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

(1) ミケーレ・バッチ (秋山聰監訳)、「ビザンティンと西欧中世における生動するイコン」、『死生学研究』、査読なし、15(2011)、

pp. 197-221.

(2) 奥健夫、「統御される霊験」、『美術フォーラム 21』、査読なし、22、pp. 37-40.

(3) 芳賀京子、「フェイディアス作、《アテナ・パルテノス》(二)：非ギリシア人の知覚する美と神性」、『美術史学』、査読なし、31 (2011)、印刷中

(4) 秋山聰、「扮装好きな二人のアルブレヒト：アルブレヒト・デューラーと枢機卿アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク」、『SPAZIO』、査読なし、69(2010) オンライン・ジャーナル

(5) 佐藤康宏、「若冲、蕭白とそうでないもの」、『美術史論叢』、査読なし、26 (2010)、pp. 1-36.

(6) 田中正之、「シャピユイ/ジェリ、「機械仕掛けのタブロー」(訳と解題)、『美術史論叢』、査読なし、26 (2010)、pp. 63-82.

(7) 秋山聰、「西洋中世における造形イメージの生動性をめぐって」、『美術史論叢』、査読なし、25 (2009)、pp. 62-80.

(8) 秋山聰、「聖俗のあわい」、『西洋美術研究』、査読なし、15 (2009)、pp. 8-15.

[学会発表] (計 6 件)

(1) 秋山聰、「イメージとヴィジョン：東西比較の試み」、国際公開シンポジウム『イメージとヴィジョン：東西比較の試み』、東京大学、2011年2月13日

(2) 秋山聰、「礼拝像の生動性：東西比較の試み」、国際ミニ・シンポジウム『礼拝像の生動性：東西比較の試み』、東京大学、2010年5月13日

(3) ミケーレ・バッチ、「ビザンティンと西欧中世における生動するアイコン」、国際ミニ・シンポジウム『礼拝像の生動性：東西比較の試み』、東京大学、2010年5月13日

(4) 秋山聰、「西欧中近世における像(イメージ)の生動性をめぐって」、地中海学会研究会、東京大学、2010年4月24日

(5) Akira Akiyama, "Human Remains and Figurative Images: A Comparison between Buddhist and Christian Practice", in: International Symposium: Dialogue on Death and Life: Views from Egypt, Bibliotheca Alexandrina, Alexandria, Egypt. 2009年10月3日 招待発表

(6) Akira Akiyama, "Interrelationship of Relics and Images in Buddhist and Christian Traditions: Comparative and Performative Aspects", in: International Symposium: Spatial Icons: Textuality and Performativity, Russian Academy of Arts, Russia. 2010年9月23日 招待発表

[図書] (計 1 件)

(1) Akira Akiyama, "Interrelationship of

Relics and Images in Buddhist and Christian Traditions: Comparative and Performative Aspects", in: Alexei Lidov(ed.), *Spatial Icons: Textuality and Performativity*, Moscow 2011, in print.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山 聰 (AKIYAMA AKIRA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50293113

(2) 研究分担者

佐藤 康宏 (SATO YASUHIRO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：5041990

(3) 連携研究者

芳賀 京子 (HAGA KYOKO)

東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80421840

京谷 啓徳 (KYOTANI YOSHINORI)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：70322063

田中 正之 (TANAKA MASAYUKI)

武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：70290872

(4) 研究協力者

奥 健夫 (OKU TAKEO)

文化庁・美術学芸課・主任文化財調査官

(5) 海外研究協力者

ミケーレ バッチ (MICHELE BACCI)

シエナ大学教授

ゲアハルト ヴォルフ (GERHARD WOLF)

在フィレンツェ、ドイツ美術史研究所長